里山の思想と新しい郊外生活

ケビン・ショート
Written by Short Kevin
訳 森 洋子

シティボーイ・カントリーボーイ

たいていの人は、ぼくを山里に住むナチュラリストだと思っている。どうも、信州か東北の山奥にある丸太小屋にでも住んでいる姿を思い描くようで、実は千葉ニュータウンの高層マンションの二十階に住んでいると知って目を丸くするのだ！

だが、ぼくがニューヨーク市とは目と鼻の先、下町ブルックリンで生まれ育ったと知れば、驚きも半減するだろう。ぼくは今でも、大都会をこよなく愛している。ニューヨークにサンフランシスコ、ロンドン、パリ、東京、大阪――とにかく、多種多様なものが密集した都会が好きなのだ。美術館やアートギャラリーに足を運んだり、書店や骨董品店をはしごしたり。ただあてもなく通りを歩いて、その街の歴史や、さまざまなものが肩を寄せ合う都会ならではの空気を感じるのもいい。ときには、にぎやかな通りに面したカフェテラスで、行き過ぎる美しい女性（それに、個性豊かな人々も！）を眺めつつ何時間も過ごすことだってある。

とはいえ、ほんの子どもの頃から、我が家では夏の数ヵ月をニュージャージー北部のアパラチア高原にある叔母の別荘で過ごす習わしだった。街からは車で一時間たらず、なのにそこにはまるで別の世界が広がっていた。酪農場にリンゴ園、トウモロコシ畑、急斜面をおおう鬱蒼とした森、そこかしこに点在するいくつもの湖。ぼくは一日中、仲間たちとそこらを探検したり、ちょっと暑くなると手近の川や湖に飛びこんだりした。

そうした夏を過ごすうちに、いつしかぼくはカントリーサイドを愛するようになっていた。そこでは、都会ではできないことがいっぱいできた。ヘビやカエルを捕まえたり、木登りをしたり、いつでも好きなときに泳ぎに行けたり。ブルックリンの家は、都会の公園としては世界有数の自然を誇るプロスペクト・パークの隣にあったが、それでもカントリーサイドの風景とはどこか違った。広々とした牧草地でウシたちがのんびり草を食む姿や、木々の枝に赤く熟したリンゴの実がなっているのを目にするたび、ぼくの心は安らいだものだ。

やがて、ぼくが中学に入る頃、我が家は都会を引き払ってアパラチア高原へ引っ越した。自分もブルックリンで生まれ育ち、ウォール街の銀行に勤める典型的なニューヨークのサラリーマンだった父は、息子たちをもっといい環境で育てたいと考えたようだ。ぼくも弟も新しい暮らしを大いに気にいったが、それでもぼくは大都会との縁を断ち切ることはしなかった。夏休みやクリスマス休暇にはニューヨーク市の郵便

里山型郊外の風景。田んぼや雑木林の向こうに、現代的な住宅がかいま見える。右側の高層ビルに筆者の自宅がある

局でアルバイトをしたし、ニューヨーク・ニックス（NBA）やニューヨーク・レンジャーズ（NHL）の試合を観に、マジソンスクエア・ガーデンへ足を運んだ。

こうして、おとなになる頃には、ぼくはシティボーイとカントリーボーイとが融合した、変わり種〟になっていた。一方では、カントリーサイドの自然を愛し、解放感を求めて広々とした景観の中をそぞろ歩きしながら、また一方では、大都会ニューヨークならではの刺激的な空気が忘れられずに街中をさまよったものだ。

二つの世界、それぞれの魅力

今の住まいは、北へ五分も歩けば千葉ニュータウン駅、そこから電車で一時間足らずで都心へ出られる。だが、反対方向へ五分歩けば、そこはまったくの別世界――四方を田んぼや畑に囲まれ、どこまでも雑木林が連なる。一時間、半日、いや明け方から夕暮れまでだって、多彩な生命の息づく美しい景観の中を歩きつづけることができる。

まさに、ぼくにはうってつけの環境。都会とカントリーサイド、二つの世界をこよなく愛する者にとって、郊外は実に魅力的だ。一般に、郊外へ行くにつれて都会の文化とは隔たりができるが、住環境はよくなっていく。この相容れない二つの要素がちょうどいい具合に共存するごく限られた空間、それこそが〝理想の郊外〟というわけだ。

ぼくにとって、都心へのアクセスのよさは欠かせない。ぼくが住む印西市に、都市としての快適さが欠けているというのではない。実際、駅の反対側には巨大なショッピングモールが広がり、そこにはフィットネスクラブや大型書店、映画館、専門店の数々や、あのスターバックスまで揃っている。日常生活には十分すぎるほどの便利さだ。

それでも時おり、ぼくの中の〝虫〟が騒ぎ出す。モールには申し分ない書店があるにもかかわらず、八重洲ブックセンターや紀伊國屋書店、三省堂といった東京の大型書店へ行きたくてたまらなくなるのだ。洋書、自然、歴史、精神文化などのコーナーで何時間だって立ち読みをしていられる。靖国通りに肩を並べている小さな古本屋を見て回るのもいい。それにこの通りには、スポーツ用品やアウトドア用品を扱うおもしろい店もいっぱいある。

ショッピングモールのスターバックスには通りに面したテーブルがあって、道行く人を眺めながらカプチーノやカフェラテを味わうこともできる。それはそれで楽しいが、やはり表参道などの賑わいには比ぶべくもない。種々雑多な人の集まる大都会ならではの、人間観察のおもしろさというものがあるのだ（ニューヨークやロンドンでは、さらに人種や言語の多彩さを味わうことができる）。

それに、いわゆる商業映画を楽しむのならモールの映画館で十分だが、時にはミュージカルやコンサートも楽しみたい。上野の国立博物館や国立科学博物館の特別展は、絶対に見逃すわけにはいかない。

大都会は、世界中から人やモノやアイデアが集まる場所。だからこそ、刺激的な時間を過ごすこともできるのだ。

だが一方では、ぼくは根っからのナチュラリストでもある。野鳥観察に植物や昆虫の観察・採集。こうした趣味は、都会の公園や庭園でも楽しむことができる。だから、ぼくは、アーバン（都会の）ナチュラリスト〟という考え方に何の矛盾も感じない。ナチュラリストに必要な資質はたった二つ。自分を取り巻く世界への好奇心と、その好奇心を満たすべく己の五感を使って動植物を直接、観察する行動力だ。かくいうぼくも、東京の真ん中で日々、フィールドワークにいそしみ、渋谷や新宿で自然観察ハイキングを行っている！

都会の公園や庭園にも驚くほど多彩な動植物が息づいているが、カントリーサイドはそのはるか上をいく。新宿御苑や小石川植物園を散策するのも実に楽しいが、田んぼの広がる里山を半日かけて歩く楽しさには遠く及ばない。里山の自然の中で、カエルの合唱に耳を澄ませたり、赤とんぼやセミを捕ったり、畦道に咲く名もない野の花を観てまわるだけでも、一日があっという間だ。千葉の里山に暮らしてもう二十年近くなるが、ここにはぼくのよく知らない野草や木々がまだまだあるのだ！

里山の自然は、白神山地や知床半島などの原生自然が持つ雄大さに比べたら、規模は小さいかもしれない。印西には、クマもいなければ、シカも、サルも、イノシシもいない。だが、里山は小さな生命のきらめきに満ちている。昆虫やカエルの種類の多さは言うに及ばず、植物愛好家にとってはまさに、無限とも言うべき野草の宝庫だ。

スケッチ＝ケビン・ショート

里山ならではの小さな自然は、季節の移ろいをつぶさに教えてくれる。雑木林では、ヤブツバキやヒサカキ、コブシ、ヤマザクラ、エゴノキ、フジ、ミズキ、クリ、ネムノキなどなど、春の初めから夏の盛りにかけて木々が代わる代わる花をつける。やがて、それらの木々が今度は色とりどりの実をつけ、穏りの秋を演出してくれるのだ。そして、冬の初めともなれば木の葉が色づき、里山にまたひとつ、すばらしい彩りを添えてくれる。

さらに、里山の景観には、自然そのものの多彩さに加えて文化的な側面がある。里山を歩いていると、その土地やそこに息づく生き物たちのエネルギーだけでなく、豊かな歴史の流れを感じることができる。田んぼや雑木林、それに、庚申塚をはじめ、いまだに道の交わる場所で旅人を見守る石像の数々を目にするたび、ぼくは何百、何千、何万年も前にその土地に暮らし、働いていた人々と、はるかな時を超えて魂が触れ合うのを感じる。

郊外の大半は、新たに開発された地域だ。住民の多くはその土地と何の関わりも持たないばかりか、自分自身の歴史や精神文化とも隔絶された生活を営んでいる。そのせいで、郊外にはどこか、人の血の通わぬ冷たい感じがある。だが、そこに豊かな里山の景観が加わるだけでその印象は一変し、時の流れを超えた営みや土地との結びつきを感じることができるようになるのだ。

住環境を考える上で、こうして身近に自然や歴史、文化を感じられる場所があるというのは計り知れない利点ではないだろうか。

郊外の可能性を生かさない日本

印西をはじめ、北千葉の多くは理想的な位置にある。電車で気軽に都心へ出られる便利さに加えて、まだ十分に豊かで美しい里山の自然を残しているからだ。ヨーロッパやアメリカの基準に照らせば、これほど望ましい住環境はない。人々は先を争って、この土地に住もうとするだろう（不動産物件に大枚はたくことも厭わないはずだ！）。

だが残念なことに、日本人は概して、ことに都市計画に携わる専門家や地方自治体の多くは、こうした郊外の可能性に気づいていないようだ。現状、千葉ニュータウンのような開発地域に住む人々は、身近な里山の自然を日々の暮らしに取り入れようとはしない。それどころか、その存在にすら気づいていない人がほとんどだ！

一方で、里山の自然を保護し、有効活用するための長期計画をきちんと打ち出している県や市町村はないに等しい。その結果、田畑や雑木林は徐々に、だが確実に荒廃の度を増し、ゴミ捨て場や機材置き場に姿を変えてしまう例も少なくない。

現にこのエッセイを書いている今も、ぼくのお気にいりの小川のいくつかは、三面張りのコンクリート用水路に変えられつつある。以前は、小川のほとりの散策を楽しんだものだというのに。そこはさまざまな魚やカエルの棲みかで、双眼鏡を持参しては、エサを捕るサギの仲間やカワセミを観察していた。夏には、小川のほとりに咲く美しいカワラナデシコを観察し、写真に撮った。カエルやザリガニを捕る子どもたちの姿を見かけたこともある。そんなときは、自分自身の少年時代をなつかしく思い出し、子どもにとって里山がいかに恵まれた環境であるかをしみじみ感じたものだ。

だがそれも深いコンクリートの水路に変わってしまっては、植物や小動物が生きる余地はない。エサがなくなれば、サギやカワセミも谷から姿を消すだろう。子どもたちが遊びに来ても、危ないからと追い返さねばならない。万一、深い水路に落っこちて、コンクリートで頭を打ちでもしたら大変だからだ。この手の環境破壊のせいで、里山は美しい自然や野生生物を失うばかりか、子どもたちを貴重な遊び場から締め出すことになるのだ。

今の調子でいけば、ここもじきに里山の豊かな自然と恵まれた住環境を失うことになるだろう。あとは、画一的な都市乱開発の仲間入りをするのみだ。

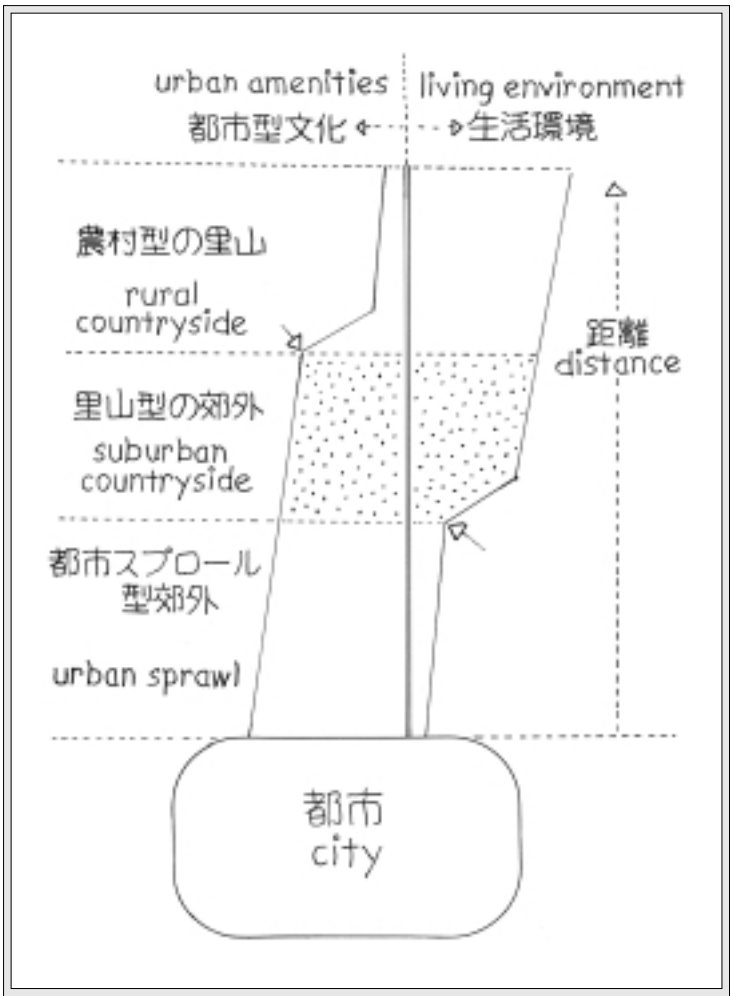
日本の郊外は、ほんとにすごい！

将来、ぼくの書いたミステリー小説がベストセラーにでもなれば、六本木か高輪あたりに超高級マンションを買おうと思っている。それから、長野か山形の山奥に広い庭付きの丸太小屋を作るつもりだ。気分次第で、新幹線（それもグリーン車）に飛び乗り、二つの棲みかを行ったり来たりするのだ！

もちろん、これはただの夢！　いまの住まいは、二年前に購入した三千五百万円のごく平均的なマンションだ。それでさえ、ぼくは住宅ローンを払うため、日夜懸命に働かなくてはならない！

それでも、ぼくは自分をラッキーだと思っている。刺激的な大都会から手ごろな距離にありながら、ここには手を伸ばせばすぐ届くところにすばらしい里山の自然が広がっているのだから。

諸外国と比べて日本の不動産は非常に高いとよく聞くが、これがニューヨークやロンドンだったら、ぼくの経済力ではここと同じような環境を手に入れることなどできないだろう。



一般論として、都心から郊外に向かって行くほど、都市型文化へのアクセスが悪くなり、生活環境がよくなる。しかし、日本の場合、交通機関が高度に発達し、効率性と信頼性が抜群。だから、通勤電車が通る範囲内は、都市型文化へのアクセスの減少が他の国より目立たない。一方、生活環境については、都市スプロール型郊外は他の国とあまり変わらないものの、ある点を過ぎると、里山自然がよい状態で残っている。この交通機関が便利でありながら、豊かな里山自然が残った「里山型の郊外」地域では、日本ならではの「郊外型デュアルライフ」が実現する。

日本では、信頼に足る公共の交通網が発達している。加えて、ほとんどの都市から比較的近いところに美しい里山の自然が残っている。つまり、この国では多くの地域で「都会の快適さ」＋「豊かな里山の暮らし」、二つの魅力を謳歌できる、二倍美味しい郊外ライフ（郊外型デュアルライフ）をたやすく実現できるというわけだ。庶民にも手の届く価格で世界最高水準の住環境を手に入れる、日本ならではの可能性がここにはあると思う。

しかし、住民、自治体の双方がその潜在能力に気づかないかぎり、このシナリオを現実に変えることはできない。気づいたのなら、数十年先を見据えた計画に着手することだ。その際、第一に優先すべきは言うまでもなく里山自然の保護――その多彩さをできるかぎり残していくために、具体的かつ実用的な長期戦略が求められるだろう。

□ケビン・ショート（Short Kevin）

ナチュラリスト、東京情報大学教授。一九四九年ニューヨーク生まれ。大学で物理・電子工学を学ぶが、ベトナム戦争に徴兵され、七一年に陸軍兵士として駐日。その間に上智大学国際部に入学、日本史、日本文学などを学んだ後、アラスカ大学で人類学修士号取得。日本に戻り小樽の漁村で三年間フィールドワークを行い、スタンフォード大学で博士号取得。日本の里山の自然に魅せられ、十数年前から千葉ニュータウンに在住。著書は、『ドクター・ケビンの里山ニッポン発見記』、『ケビンの観察記 海辺の仲間たち』、『東京ネイチャー・ウオッチング』ほか。